

説教要旨 「雛を羽の下に集めるように」



ルカによる福音書 13章 22～30節

ファリサイ派の人々が近寄ってきて「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしております」(31節)と言います。これがイエス様の身を案じての忠告なのかどうかははっきりしませんが、ヘロデの支配するこの土地、ガリラヤから出て行くようにと言うのです。対してイエス様は、ヘロデにこう伝えなさいと言われました。「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える」(32節)それは、態々殺そうとしなくても、この働きはもうじき終るのだから心配するなと言うことでしょうか。そして続けて人々に「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ」(33節)と語るのです。

当時エルサレムはローマ帝国の直轄地になっており、ヘロデではなくローマ総督ポンティオ・ピラトが支配していました。イエス様はヘロデを恐れてエルサレムへ逃れるのではありません。預言者として死ぬために、エルサレムへと向かっていることを高々と宣言しているのです。

鳥の雛は、親鳥の翼の下に守られていなければ生き延びることはできません。自分の力で、あるいは人間どうしの協力によって生きていくのだ、いけるのだ、と思っている私たちは、自分たちだけでなんとかやっけていけると思っている雛のようなものです。神様が差し伸べて下さっている救いの手を振り払い、自分が主人となって、自分の思い通りに、好き勝手に生きようとするのです。

自分の力でやっけていける。神様なんて頼りにならない。と、その招きに応じようとしなない、頑なに私たちを、神様は「めん鳥が雛を羽の下に集めるように」(34節)招いてくださっています。その愛の確かさを示すために、そのひとり子、イエス・キリストをこの世界にお送りくださり、惨めに、孤独に十字架につけられたのです。

それほどまでに私たちを愛してくださっているのです。それほどまでして、私たちをその羽の下へと招いてくださっているのです。



(2019・9・29 説教者：稲垣真実)